

## HALOHALO ボランティア活動で学んだこと

飯島泉美

今回フィリピンでの留学中にフィリピンの貧困地域を目の当たりにし、barung barong などのような家に住んでいる人を見て、貧困地域の人のために何かできることはないかと思い、ボランティアに応募しました。大学でタガログ語を専攻しているため、現地では主にタガログ語を使つてのインターン生の活動補助を行いました。

今回エラップでお母さんたちが製品を作っているお手伝いをした時に感じたことは、仕事の仕方が全く異なるということです。日本ではどんな仕事であっても必ず期日内に行うのは”仕事”として当たり前のことです。ですがお母さんたちは、もちろん家庭を持ちその中で仕事があるのは当然ですが、期日に間に合わなくても申し訳そうな顔すらしませんでした。彼女たちの中には材料が足りてないから当然だという思いがあつたのだと思います。そのため、フィリピンで仕事をするためには、すべての物事を事前に完璧に準備する必要があると感じました。そのため、材料の不足に対応するために、事前に材料の不足がある場合確認した上で、いつ頃までに入手できるかを明示してもらふ必要があると思いました。明示してもらった上で、お金がマネージメントグループに了承され、お母さんたちに手渡されるまでの時間を、納期に含めて考えるべきでした。

また、お母さんたちの関心ごとが HALOHALO のビジョンに向いてないということが重大なズレだと感じた。お母さんたちは、現在の家庭にお金が必要であり、そのお金をどう工面するかに関心が向いています。そのため、HALOHALO 側はお母さんたちが自主性を持って彼女たちの活動を回していくことを期待していますが、お母さんたちはそれを理解しているようには見えません。そのため、一度お母さんたちになぜ HALOHALO はこのような活動をしているのか、貧困から抜け出すためにはどのような取り組みが必要なため、HALOHALO がこのような活動をしているのかを説明して理解してもらふことができれば、もっと目的意識を持ち活動してもらふことができると思います。そして、目的意識を持ち活動してもらえれば、商品の品質が上がり、フィリピンマニラの halohalo はよくなるのではないかと思います。

現地の人々とともに一つのプロジェクトを成し遂げるといふのはとても貴重な経験でした。お母さんたちは皆、日本人の私たちには考えられないバックグラウンドを持ち、異なる価値観で仕事をします。それをボランティアという形で団体の中に入り、感じる事ができたことがこれから社会に出て仕事をする際に、必ず役に立つと思います。

最後に、このような貴重な経験を与えてくださった HALOHALO さんに感謝いたします。

